さくら色ドロップ

碧海ユズ吉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
さくら色ドロップ

【Ｎコード】
Ｎ０３７０Ｚ

【作者名】
碧海ユズ吉

【あらすじ】
環境汚染された近未来。
電脳世界では人工知能の発達で電子体と呼ばれる自律ＡＩが暮らし、バーチャルリアリティは様々な娯楽を提供していた。
乙女系恋愛ゲームもその一つ。京（みやこ）は親友に誘われて、乙女ゲー専門Ｖ．Ｓカフェで乙女ゲームの電脳空間に潜水することになった。
軽い気持ちで潜水した女子高生が体験する、歪んだ恋のお話。
※個人サイトからの転載作品です。

第1話　地下街・映像潜水・さくら色ドロップ

なにやってるんだろう。

さっきから自分の視線は、迷子の風船を追いかけていた。
さすがに清掃がいき届きにくく黒ずんでしまっている天井の隅っこ、赤い風船が窮屈そうにフワフワと漂っている。
ゴム繊維に織り込まれたモニタ粒子の結合で、風船の表面には子供用の広告映像が繰り返し繰り返し流れていた。教育テレビによくでてくるアニメキャラが愛嬌のある憎たらしい笑顔で跳んだり跳ねたり。

視線を水平に戻すと、ここが都会の地下だとは思わせない広い車線が続いている。
こちらの手を掴んで、問答無用で引きずって進んでいく四田（しだ）ちゃんの背中が、人混みの中で堂々としたオーラを放っていた。
理不尽な四田ちゃんの行軍はこちらの歩調をまったく考慮していないので、時折足がもつれ、通行人にぶつかりそうになった。
通行人が立てる靴音が、何重と分厚いノイズの波となり、閉塞した空間を震わせる。
車線道路の両側には混沌とした店が呆れるほど並んでいた。ディスカウントショップやら、ジャンクフード店やら、今時珍しい紙製の書店なんてものまで何でも揃っている。

都会の蟻塚と言わしめるほど、複雑に入り組んだ積層地下街。
今や人工現実感の発達に伴ってサイバーマルチセンサーシステムが確立された時代、最先端をいくこの街は電子との共存というもの

を様々な形で体現していた。
店頭で立体映像のデモムービーがはしゃぐのはもはや基本商法として、昔の時代を生きていた絶滅種と戯れることができる古代生物館（もちろん全て人工現実感でできた電子の塊なのだが、見た目も触感も匂いも生々しいと思う再現率だ）、環境汚染で禁じられた娯楽の幾つかも体験できる。例えば海水浴とか。

特に、今世紀の成果は、環境維持機構の人工知能に自立的な自我が芽生えたこと。
自我に目覚めた人工知能をもとに、大量生産された自律ＡＩが一般流通にも充分行き渡るほど普及したことで、社会はさらに機械文明の森に迷い込んでいった。
つまり人工現実感――バーチャルリアリティそのものに、心というものが付加される時代が訪れたのだ。
これによって無機物特有の『のっぺら感』はほとんど解消されて、親しみやすい媒体というイメージを消費者に与えることに成功。
一見使い道がなさそなファクターではあるけれど、このＡＩプログラムが配布されたことで改善されたものもある。
柔軟な学習思考を得た末に、機械の音声認証や視線認証などの誤差は大幅に減らせたというし、ロボットにありがちな不気味な『のっぺら感』が無くなったのは大きな功績だ。
なんたってそこには心があるから。
そしてバーチャルに自我を植え付けるという突飛なＡＩプログラムは、ある娯楽において驚異的な需要を叩きだしていた。

「ねー、四田ちゃん。やっぱりやめましょうよー、わたし映画潜水館にいきたいです。最新作のアクションムービーやってるんですっ

てば。今なら割引価格で見られるのに」
映像の世界に意識を潜水させる体感形式、それを採用しているものの一つが映画潜水館。
自分を中心として周囲でめまぐるしく動き回る立体的なアクションシーンは大迫力、見応えがある。初めて見たときの高揚を、未だに忘れることができない。
他の観客に椅子を後ろから蹴られることも、ジャンクフードをバリボリ咀嚼する不快な音も、他の観客に聞こえるくらいの声量で口を突いて出る悪態も、なにものにも邪魔されずに思う存分楽しめる。
システム上、精神への負担が多少かかるのがデメリットだ。そのため安全を図る意味で15禁にレイティングされている映像潜水式は、京（みやこ）にとって長年憧れの的だった。
はやく自分もリアルに映像を体感したくてウズウズしていた。
潜水式を採用している映画館に去年ようやく入ることが許されて以来、新しいオモチャに興奮する子供のように結構な頻度で通い詰めているのだ。

しかし前を行く四田ちゃんは、ぐだついた懇願を気の強い笑みで弾いてしまう。
「映像潜水式が好きなら、これから行くところだって充分満足できるはずっしょ」
「……。だってぇ、そこは興味無いんですもーん……」
「ヤコ、好き嫌いはいくないって。地味なあんたが花開くかもしれないでしょ」
好き嫌いという以前に興味が無いと何度言ったら。意図的に話をずらす四田ちゃんに、ついつい京は恨めしげな半目を向けてしまう。
学生の休日、四田ちゃんと地下街に繰り出したことに早くも後悔してきた。

事の始まりは学校の休み時間。

最近、男子生徒も女子生徒も等しく共通の話題を膨らませる光景を、この頃よく目にしていた。みんなタチの悪いウイルスに集団感染したみたいにとある話題を展開させている。

つぎ誰落とす？　あたしはあの子かなー。昨日コクるところまでいってさー。あそこの選択肢は難しいよね……。

話の本筋を理解していることが前提の、傍からしたらなにを対象に語っているのかわからない。

仲間はずれも嫌なので、少しでも興味があるフリをして話の輪に突入したのが運の尽き。まったくもってもう勘弁してくださいと拒否したくなる話題だった。

実際には、最近、という言葉は当てはまらない。それは映像潜水式という魅力を覚えたばかりの年頃の少年少女達が、すべからく経験する一種の通過点だったからだ。

すなわち電脳空間にダイブする優越感と感覚に夢中になる、青臭い時期。

このシーンが意識と隣り合わせのところで再現されている。すごい。ならこのジャンルで映像潜水したらどうなるんだろう？　新しいことに目覚めた子供たちは見境がなくなるほど探求していく。

そして極めつけは、こういうシチュエーションを再現したいと思いつく。しかも欲望満タンな学生の頃に誰もが一度は通る道。

そこに風が吹き溜まるようにして、『学生』のあいだで常にトレンドとなっているのが、

「なんで私、乙女ゲーやりにいかなきゃいけないんですかねー……」

恋愛シミュレーションゲーム。

シシシ！　モーモーシリアル、お店で売ってるよ！　甘くてオイシくてボクもうお腹いっぱいユメをみているみたい。

視線をあげた先で、からかうように風船の中のキャラクターがぴょんぴょん跳ねているのが憎たらしいったらありゃしない。

＊

圭太（けいた）、離れたくないよ、ねぇ、圭太。

乙女ゲーというコンテンツを久しぶりに耳にしたとき、ちょっぴり昔の甘酸っぱい記憶が胸をよぎった。昔といってもそんなに昔じゃない、十五歳になって二ヶ月経った頃のこと。けれどもあの時に体験した記憶は、ずっと心の底で静かに息づいている。

恋愛バーチャルシミュレーションが思わぬ脚光を浴びたのは、自律ＡＩが一般に普及してすぐのことだった。

それまでにも恋愛ゲームに現を抜かす人はいて、まともに返事もくれない二次元の『彼氏』『彼女』を愛でることを、社会は揃って気持ち悪いとバカにしたものだった。

しかし自律ＡＩを、恋愛ゲームの攻略キャラに付加したとしたら、どうだろう。

どんなに焦がれても反応をくれなかった画面の向こうの『恋人』たち。

彼らに心ができて、木偶人形とバカにすることができなくなり、現実と等しく滑らかなコミュニケーションを可能としたなら？

好きだ、という言葉に感情を垣間見ることができたとしたら。

答えは、現代のありかたにそのまま反映された。恋愛ゲームジャンキーがいつの世代にも一定層は潜むほどの中毒性を持ち、恋愛ゲームに潜水できる専門のバーチャルシミュレーターカフェ（長いので、Ｖ・Ｓカフェというのが俗称）なるものが我もと競うように全国に建ち並ぶ光景。

生身の人間よりも電子のキャラクターと恋を語らうほうが有意義。そんな風潮もまた形成されていってしまった。

かくいう京も、一度だけ電脳恋愛の中毒性に骨抜きにされた一人

だった。
そして恋愛ゲームに手を出して、傷ついたからこそ、今日にいたるまで恋愛ゲームを頑なに避けていたのだ。断言する、あれはろくなもんじゃない。
なのに、流れに抗うこともできず、結局戻ってきてしまった。

四田ちゃんが足を運んだのは、近くにケーキバイキングや、乙女系同人グッズを取り扱ったショップが完備された、いわゆる客層を乙女な女の子向けに意識した大通りの一角。
白と暖色系で統一された大型の建物に、ポップな字体で『V・Sカフェ　さくら色ドロップ』という映像ロゴが飾られている。
ケバいどころか、薬局店のように清潔な趣を心がけているのは安心した。フワフワ甘い店名で台無しな気もするけれど。
ここが四田ちゃんの行きつけ、乙女恋愛系専門V・Sカフェらしい。乙女ゲーしか取り扱っていないのにも関わらず経営が維持できていることからも、需要は推して知るべし。

「とーちゃーく。特別に今回はあたしがおごるよ、割引ポイントもあるしぃ」
先程の映画潜水館のお返しか。四田ちゃんの不思議猫のようなニタニタ笑いに、京は釈然としなくて唇を噛む。
「私の四田ちゃんはこんなことしないです、ハッ、さては四田ちゃんの皮を被った電子ミュータントですね！」
「このあいだの映画の影響モロ受けすぎなんですけど。いい、ヤコ？　これはあんたのためでもあんのよ。学校で話題に乗れずに孤高を気取ってたら、すぐにハブされるんだからさ。触りだけでも知っときゃあ、あとは適当に話し合わせられるじゃん？」

「そこが学校生活の面倒なとこですね……」
学校という一種の閉鎖空間で展開される交友は、しばしばナイフのように鋭く残酷な一面をみせる。
彼らの流行に合わせるか否か、今後の付き合いも考えると死活問題だった。なにがきっかけで無視されたりいじめられたりするか分からない危うい部分が学校生活にはある。
四田ちゃんはその辺、うまく渡り歩いているよなぁ、といつも感心していた。彼女と親友になれたことは、窮屈を強いられる学校で数少ない幸運だ。
とりあえず正論過ぎていよいよ反論が喉の奥で潰える。がっくりと肩が落ちる。重い溜息は、どこからともなく聞こえてくるアニソンに掻き消された。
「わかりました。いきます」
「そうこなくっちゃ。あぁん、待っててねウィルきゅん。すぐにログインするから！」
後半はここにはいない、というより恐らくこの汚染された現実世界にはそもそも存在すらしていない誰かに向けて放たれたもの。両手を組み合わせてご機嫌な四田ちゃんに、ついに返す言葉を失う。
なんだかんだ言って、彼女もずいぶん毒素の強い乙女ゲーに入れ込んでしまっている。

ともあれ、店の前で立ち往生するのもなんなので、気が進まないけれども四田ちゃんを促して『さくら色ドロップ』の入り口を潜った。
入店してすぐのところに、攻略ガイドが記された電子ペーパーのラックがあり、ついでに店で取り扱っているソフトの派生グッズが商品棚に陳列されているのが目に入った。専門のグッズショップには遠く及ばない品揃えだが、そこそこ売れているのかもしれない。
無視して受付に辿り着くと、愛想の良い女性店員の笑みが出迎えてくれる。

「ようこそ、『さくら色ドロップ』へ。身分証明書と会員カードを確認しますので、お出しくださーい」
映像潜水式を採用している店は、厳重に年齢確認をするのがマニュアルだった。
四田ちゃんと一緒に住民ＩＤカードを提出、店員が慣れた手つきで認証機に通し、真面目と不真面目の中間くらいの目つきで事務的に確認を終えてからＩＤカードを返却。
「この子初めてなんですけどー」
四田ちゃんの手が京の肩をポンと叩くと、店員は緩い態度をさらに軟化させる。
「でしたら、初めに会員カードの作成とセーブデータ保管先の決定をして頂きますぅ」
その後も当店の説明とやらを片手間に聞き流しながら、手順に沿って会員カードを作る。
「ではセーブデータの保管先を決めさせて頂きまーす。二通りありまして、一つはお持ちのケータイに保存する形式、もう一つはデータカードを作成して保存する形式です。ケータイタイプは、いつでもどこでも『恋人』のデータを閲覧でき、会話をすることもできます。カードタイプですと、そういったことはできなくてですねぇ、もっぱらデータを保存するしか機能はないんですけど、そのぶん容量とか安全性は高いですよぉ。カード自体も耐久性があるから落としても壊れにくいですし」
どっちにします？　と問われ、
「カードでお願いします」
即答すると、隣ですでに入店手続きを終えてペーパーラックを眺めていた四田ちゃんが、よく分からない同意を示してきた。
「やっぱそっちにするよねぇ。ケータイタイプは会話できて気分が盛り上がるけど、カードのほうが安心できるっていうか」
「う、うん……そうですね」

単にこんなことで貴重なケータイのメモリを圧迫したくなかったからなんだが。
利用時間は二時間にしておいた。熱中してついつい時間を忘れてしまうタイプの店には必須の、時間規約。
中でもロールプレイ型バーチャルシミュレーションは、時間加圧というシステムが組み込まれている。簡単に言えばゲームの中で過ごす一時間が、現実世界ではたった十分しか経っていないといった、脳の処理速度を速くする仕組みだ。
問題となるのは実際のプレイ時間なので、システム上ゲーム内で何日過ごしてもプレイ時間が一定の値にまで至らなければ問題は無い。
標準的な加圧設定は『一時間＝十分』で、利用時間が現実の二時間ならば、ゲーム内では十二時間も過ごせることになる。
「では、ごゆっくりお楽しみくださーい」
なんだか安っぽいホストクラブの世界に踏み込んでしまったような気がして、こっそり米神に指を添えた。

個室に入って、一息ついた。
入室してしばらくすると、『入室者の容姿を取り込みました』といった意味の清潔な電子音が鳴った。ここでスキャニングされた容姿データは、多少のデフォルメ補正をかけたのち、電脳空間にログインしたときの自分の姿に使うことができる。
飲み物や軽食を広げられるテーブルと、壁に埋め込まれた検索用小型レンズ、全身を預けて寝そべるタイプのダイブチェア。それだけで構成された極々手狭な空間が、無限の電脳空間に飛び立つ庶民的な門なのだった。
ほんと、なにやってるんだろう。

セルフサービスで作ってきた飲み物を一口含み、溜息と共にテーブルに置いた。
料金は四田ちゃんが持ってくれたから、無下に帰ることもできない。せっかくだから久しぶりに遊んでいこう。

渋々腹をくくり、唯一の座席であるダイブチェアに身を沈める。マッサージチェアをモデルにデザインを研究したのだという。素晴らしく体にフィットして寝心地はいい。
茶がかった二つ結いの髪が首をくすぐるので、軽く外に払って居心地を確保。
検索レンズの前に手をかざす。するとセンサーが反応して起動状態に移るので、つまむ動作で電子画像を引きずり出した。
京の目の前に、検索メニューが爽やかな擦過音と共に並ぶ。店にインプットされている乙女ゲーソフトが瞬く間にピックアップされた。
ネットでちらっと見かけたことがあるタイトル。それらには目もくれずに適当なものを探す。真面目にプレイする気も無ければ恋愛する気も無いから。
いくつかのタグを使ってゲームを絞り込んでいくと、あるソフトが目に入った。

『ここは乙女のディストピア』

男の子と恋愛して幸せな時間を過ごすというコンセプトに、真っ向から喧嘩を売ったような残念なタイトルであった。
逆に興味を覚えて、詳細なページを開いてみる。
いわゆるネタに走ったバカゲー。マイナー寄りの作品だ。攻略対象の少年たちの笑みが、どことなくあくどそうなのはあれだろうか、デザイナーの趣味なのか自分の目がおかしいのか。
ジャンルは現代学園もの。攻略対象者は全て優秀で家柄もよくて

美形、ただし何かしらの致命的な欠点を抱えているらしい。君の愛で彼らを矯正してあげよう！　というキャッチコピーが新鮮だった。
これなら感情移入せずに遊べるかも。
決めた。

『ここは乙女のディストピア』を読み込ませ、あとはセーブデータ用カードを、ダイブチェア付属のポケットに差し込む。プレイするにあたって主人公の基礎データを作成する。名前はどうするか、容姿データは読み込みしたものを使うかソフトで用意されたアバターを使うか……。
これで準備完了、久しぶりだからちょっとドキドキした。
圭太。憂鬱とも甘いともいえる不思議な気分を、今日一日で何回も思い出している。
もうあんな恋はしない。恋愛ゲームであんな思いは、したくない。
深呼吸で体から力を抜き、ダイブチェアと連結したパーソナルディスプレイを装着する。コンパクトな機器に目回りが覆われ、視界が暗闇に閉ざされた。
『潜水します。どうぞ快適な仮想現実を』
脳内に直接木霊するアナウンス。新しい世界に飛び立つにふさわしい、落ち着いた声音に背中を押される気分で、京の意識は広大な電子の海に潜っていく。

第2話　赤毛少年・電子の空・蛇口の水

今の時代でも、保存媒体に焼いたプログラムを家庭ゲーム機で遊ぶ形式はある。

しかしＶ．Ｓは違う。ソフトのデータを一手に管理している複数の高性能サーバー管理局がある。各カフェは詰まるところ、個別にソフトを置いているのではなく、管理局の大元のソフトにアクセスする権利を買っている。

自律ＡＩは一キャラにつき一人が担当し、ソフトにアクセスしてきた利用者を個別の多層空間ごとに案内して、同時に相手をするという高度な知能を有しているのだった。

京が選んだこのソフトは元々アクセス数がそれほどなく、本来ならば自分と恋愛している傍らで別のプレイヤーの相手をしているかもしれないところを、もしかしたら京一人に対応を集中してくれるという、贅沢な環境になっていることも有り得るのだ。

旧時代の空は、今と違った色をしていたのだという。まだ光化学スモッグで損傷していなかった頃、人類の頭上にあったのは青い空。海もまた吸い込まれそうな濃い青をし、緑は瑞々しかった。色々なものが欠けてしまったのは、欲を突き詰めた人間の業なのだと。

電子結合で再現された空を振り仰ぎ、太陽のまぶしさと融和した青さに見とれる。

現実世界より仮想現実のほうがかつての青い星になにもかも近いのは皮肉だと思う。それは誰もが仮想現実に依存してしまうのもや

むなし。

四階建て白塗りの校舎はコの字型で、真ん中に緑の校庭を抱き込むように建っている。他にも体育館に始まって、研究学部の施設の頭角が窺えた。

煉瓦式に詰め込まれた路面の端っこに洒落た街灯が建ち並び、一目見ただけでここはいわゆるお金持ちの通う学校なのだと知れる。

青空の下にさんざめく学校というものを拝めるのは、今では映像の中だけになってしまった。モブキャラらしき学生を校庭や校舎に見かけるものの、騒がしさだとか匂いが希薄で、全体的にハリボテ感は否めない。

とりあえずまずはなにをするべきか、一挙手でメニューウインドウを呼び出して確認作業。空中投影されたターコイズブルーのウインドウを半分透かして向こう側が見える。

まずは攻略キャラ達と出会いましょう、とステップが表示されていた。

どこに奴らが潜んでいるのかまだ把握できていないので、

「まずは適当に歩いてみましょうか――」

直後、思考が凍った。

ウインドウの向こうに、いつのまにか顔があった。

目付きの悪い灰色の瞳が穴があくほどこちらを凝視している。死んだ魚の目を人間にはめこんだらこうなるんじゃないかという瞳孔をしていた。

「よぅ」

「わあああああ！？」

目が喋ったので恥じらいもない悲鳴をあげると、灰色の目は気分を害したように眇めて前屈みから身を起こした。ウインドウ越しの

ホラーチックな目はなんだったのか、今はいたって普通の雰囲気をまとっている。
「久しぶりのプレイヤー一名様ご案内ー」
炎のような紅い頭髪に、冬の空を思わせる灰色の瞳。いかにも不良グループを纏めてますといった目付きの悪さで、京を無遠慮に観察していた。
「は、はひ……」
一方で京の心臓はまだバクバクいっている。いきなり現れすぎだろう。
人工現実感に自律ＡＩが付加される時代、ということはつまり目の前の少年も例外なく『心』を持った電子体ということになるはずだ。だから出だしがフリーダムなのだと思う。
少年はちょいと差し出した手を仰いだ。
「すいませーん、セーブデータって、持ってます？」
「あ、う。初めてです」
「はいはい、スロットの新規データ確認しました、ＯＫでーす」
両腕を使って頭上に丸を作るところをどっかで見たことがあると思ったら、駐車移動を促す誘導員そっくりだ。

「俺は榊虎丸（さかき・とらまる）っていうんで、一応このソフトの主な顔やってます、なんか用があったら声かけてくださーい」
恋愛シミュレーションでは、複数攻略対象がいる場合、その中でもゲームの『顔』となる主格のキャラがいる。パッケージに大きく描かれるキャラが大抵それだ。
榊虎丸という少年は、いわゆるゲームの代表キャラなのだった。紹介文では、気が強いものの面倒見がいい、と載っていたが実際はどうなのだろう。
なんだか職務怠慢してそうなやる気ない態度をしてるけど。
「京。朝間京（あさま・みやこ）です……よろしくお願いします」
差し出された手をおっかなびっくり握ると、生々しい体温が伝わ

ってくる。
今や人工現実感の再現度は人を惑わすレベルに達している。惑わしすぎて、逆に『これは仮想現実ですよ』とアピールするため、わざと再現度のレベルを落とす場合もあるくらいに。
「あのー。オープニングムービーとかありますけど、どうします？」
さながらアトラクションの係員みたく、怠そうな勤務態度で促す榊虎丸少年。
昨今、攻略キャラが案内人を兼任するタイプも珍しくなかったりする。それにしたってこいつの態度は接客としてはなっていないが。真面目に取り組む気がないとはいえ、夢を壊さないでくれるかなー、と若干不満げに相手を睨みやった。
所詮これはバカゲーだ。割り切ってしまえば萎えていた気鋭も戻ってくる。
「いい、見ない。で？　私はこのまま学校に入ればいいんですか？」
「耀桜（ようおう）学園ね。じゃあ初めますよー。ステンバーイ、ステンバーイ」
「あの、遊んでいる間ももしかしてそんな感じなんですかね？　例えば上手く説明できないんですが――貴様のその態度」
「いえ、ちゃんとやりますよー。仕事なんで、あい、ご心配なく。お楽しみくださーい」
うわぁ。この手のサービスでは言っちゃいけないことを言ったよ。仕事、だってさ。
手をヒラヒラさせて文字通りノイズまみれに消えた少年。開始時のポジションに向かったのだ。結局まともな瞳とあまり目を合わせることはなかったな、と思う。

一人取り残されて所在なさげな気分になりながらも、これからどうやって少年達と遊ぼうか思案する。
「まず、誰が一番まともなんでしょう」
メニューウインドウに入っている紹介文には四人の攻略相手の情報。

一人目は榊虎丸（さかき・とらまる）。不良系良い人少年。父が高級レストランを経営していて、彼自身も趣味は料理をすること。動物が好きで他人の面倒をついつい見てしまう性分あり。夢は調教師になること。武器：警棒。

二人目は清城ルイ（せいじょう・〃）。天使系ナンパ少年。清城財閥の御曹司で、勉強もできて運動もできて明るくてモテてうんたらかんたら。女の子が大好きで、その情熱は行く先々で父親になるレベルと噂されるほど。夢はお花畑の楽園を作って終末戦争。武器：銃。

三人目は西鷹風吹（にしたか・ふぶき）。やんちゃ系ショタ少年。代々アスリートの家系に生まれ、スポーツ万能。将来陸上選手の推薦確実と言われている。ただし趣味はアニメ・漫画・ゲーム・ラノベの二次元オタク。二次元が好きで戦車にも乗る。将来の夢は声優。武器：ナイフ。

四人目は遠野佑（とおの・たすく）。王子系クール少年。有名な病院の院長息子で、読書したり小説を書くのが好き。医学には進みたくないお年頃。読書と並行してできる作業が好きで、食べ物ではサンドイッチが好物。女の子の白い肌を通る血管フェチ。夢は小説家。武器：鞭。

ね、バカゲーでしょう？　と、誰にともなくつい同意を求めてしまった。

ここでまともなのは一択しかねぇ。ウインドウを見定める瞳がカッと見開く。

榊虎丸。さっき顔を合わせた不良少年。この人だ。かなり不安ではあるけれど。
目標を定めると結構前向きになれる。榊虎丸と正式にお目通りフラグを立てるため、桜をモチーフにした門扉を潜った。そのあいだにもウインドウで改めて自分の立場を確認しておく。

あなたは、有数の学園都市である耀桜学園に転校してきた女の子。実は七番目のサイキックフォースの使い手で、前世は世界の守護天使。聖女の魅力で数多の男を虜にしていました。近い未来に起こる天使と人間の戦争に備え、あなたは耀桜学園で共に戦うパートナーを見つけるのでした……。さて、あなたにふさわしいパートナーは誰？

一番まともじゃなかったのは私でした。
あらすじが映像潜水する前に見たものと違うのはどういう了見だ。思わず目を皿のようにして読んでしまい、仰天のあまり絶句する。肩書きが一貫していないし、そもそも主人公は天使と人間のどっち側について戦うのか知らないし、天使側だったら人間側にパートナーを探しにいくのはおかしいし、第一現代学園ジャンルはどこいったの、七番目まであるってことはサイキックフォースの使い手はあと六人いるのか……。
こりゃ売れないわ……。というのが正直な感想。
苦笑というより失笑の域で歩を進める。芝生で談話する生徒、木陰で本を読む生徒を見回し、自分の服装に目を落とした。容姿はスキャニングしたデータだが、服装は耀桜学園の女子制服で、茶色とくすんだ桜色の組み合わせが何ともミスマッチだった。
脳天気なＢＧＭがループする校庭の、真ん中にさしかかった頃。
長閑な学園はいきなり狂気の沙汰に包まれた。

「あれは、サイキックフォーサー京さんだ！」「ほんとだ、守護天使京さんよ！」「俺たちの聖女京さんだ！」「ジーク京！　ジーク京！」「私をパートナーに！」「俺を家来に！」「ボクを奴隷に！」「京さーん」「はぁはぁ」

さながら世界的有名人に遭遇したかのように、休み時間を過ごしていた生徒が目の色を変えて名指しにした挙げ句、守護天使の寵愛を得るためか単なるファン心理なのか土埃をあげて迫ってきた。

「何故か正体モロバレですよ！？」

そういえば聖女の魅力で数多の男を虜にしていたという説明を思い出す。転生してからさらに魅力に拍車がかったらしく、女性まで虜にしているようだが。主に宗教アイドル国家な意味で。

虫を集める灯火採集より強力な集客率に脅威を覚えてしまう京だ。

何重奏にも響く駆け足は地鳴りを起こし、生徒達が爛々とした眼差しで京をあっという間に取り囲む。彼方此方から伸びる手にもみくちゃにされ、身動きが取れなくなった。

「や、やめてください！　髪、ひっぱらないで！　痛い痛い！　……誰ですかスカートまくったの！　そこ、カメラのレンズが見えてますよ！　盗撮は無しです！」

こ、このままじゃ全年齢の壁を破壊される……！　服に滑り込んでくる不埒な手を叩き落としながら危機感を急速に強める。群衆の笑みが一様に不気味な仮面に思えてくる。京さん、京さん、京さん……。

「誰か、助けてください……！」

群衆の中から男子の悲鳴があがったのはそのときだ。

誰かにダメージを負わされたらしく、被害者は外側から京のいる内側に向かって次々と続出する。暴走車が障害物をひき殺していく、そんな場面にも似ている。

誰かがこちらに突き進んでくる？　恐る恐る目をあけて身構えた

時には。
「こっち」
無数の手の中から生えてきた一本が、強い意思を秘めて京の細腕を掴む。引っ張られるがままに分厚い群衆の海を掻き分けて、そのたった一本の腕だけを頼りに、頭を庇いながら走った。
こちらが走るのに合わせて群衆も追いすがってくるため、なかなか安息の場所に辿り着けない。校庭を突っ走り、校舎を回り込んでとにかく走る。肉体的には疲れなどほとんど負うことはないのに、精神のほうがヘトヘトで呼吸も荒くなっていた。

ようやく一息つけたのは、校舎裏に引っ張り込まれた時。手の持ち主に固く抱き寄せられ、息を殺して外の様子をうかがえば、もうこちらを追ってくる亡者はいない。
相手の息遣いがわかるほど密着していた京は、そこでパッと顔をあげる。
思わず胸中で、ビンゴ、と呟いてしまった。
「大丈夫……もう行ったみたいだ」
赤毛に灰色の目付きの悪い瞳。京を群衆から助け出してくれたのは、間違いなくついさっき顔見せした相手その人だ。ただ、なんというか外の様子を窺う真剣な表情はとてもじゃないけれど、ついぞの怠そうな少年と同一人物とは思えない演技力。
「あの……助けてくれてありがとうございました。虎丸くん」
おずおずと至近距離でお礼を口にすると、向こうからきょとんとした顔をされる。
「俺、アンタに名前言ったっけ？」
「さっき」
「悪いけどアンタとは初めて会ったよ。こんな危なっかしいヤツを忘れるとは思えねーし」
さりげなく乙女向けなセリフを混ぜてきやがりました。素っ気ない表情でそっぽをむかれ、あまつさえそっと体を離す赤毛少年。な

るほど、序盤はまだ親密度がないからこんな調子になるわけだ。
設定はどうであれ無難なスタートを切ったことに安堵しつつ、京はストーリーを進めるため積極的に話しかける。よく見下ろせば制服が乱れていたので、虎丸に若干背を向ける形で身だしなみを整えながら。
「あの、初対面でなんなんですけど、どうしてさっき私を助けてくれたんですか？」
「見るからに困ってたから。それだけじゃ助ける理由になんない？」
「いえ、そんなことないです！　ありがとうございました！」
脳裏に、他人の面倒をついつい見てしまう性分、という彼のプロフィールがよぎり、知らずと表情がほころぶ。システム上の第一印象は良い感じだ。困っている人を放っておけない、助けることに理由なんていらない、優しい人。

「アンタはこれから天界と人間界の戦争を調停するために戦わなくちゃいけないんだ、その辺は同情するよサイキックフォーサー守護天使聖女朝間京」

高速で虎丸少年を振り返っていました。
虎丸は壁に背を預けて腕組みしており、涼しげに京を眺めている。
おいおい仮にも自律ＡＩだろ、今のセリフを笑わずに言えたあんたがすごいよ。
「あの、私お忍びでこの学校にきたんじゃないんですかね？　ひっそりと戦場のパートナーになってくれる人を探そうとしてるはずなんですけど、なんかみんな私の正体をあっさり見抜いているようで」
「アンタこそなに言ってるんだ？　サイキックフォーサー守護天使聖女が体内に満ちるオーラを隠せるわけないだろーが。アンタを視野にいれたヤツは片っ端から魅入られ、崇高な使命を強制的に脳に理解させられ打ち震えて跪くんだから」

「ひっでー設定ですね、この主人公は」
スラスラとそんな説明を繰り出せる意味では、虎丸もけっこうな電波だとは思うのだけれど。
ともあれ歩くたびに京が背負った使命は広く知れ渡り、宣伝しなくても勝手にサイキックフォーサー守護天使聖女の隷属軍団は増えていくという塩梅らしい。怖い。
そこではたと気付く。虎丸はさきほどの群衆みたく、盲目的に迫ってこない。
「虎丸くんは、私を見ても正気なんですね」
「さぁ、どうしてだろ。そこいらの奴らとは違うってことじゃん？」
元も子もないことを言えば、攻略対象だからそこら辺のモブとは扱いが違うのだろう。
でも。

「そうですね、虎丸くんは良い人です。他の人とは違う」

一人でも良心的な精神状態の人間がいるのは良いことだ、妙に安堵して額の疑似汗を拭った京だが。
何故か虎丸はいきなり顔を真っ赤にさせてあたふたと挙動不審になる。ひいては怒りっぽく眉根を寄せ、ぶすっと可愛い唇を尖らせる始末。
「べ、別に俺は優しくなんかねーし。いっとくけど、アンタじゃなかったら助けてなんかいないんだからな！　調子にのんなよな！」
「――ちょっと『ポーズ』」
生ぬるい笑みのまま反射的に音声コマンドを口にすると、頬を赤らめていた少年の様子もページをめくるようにガラリと変化した。つまり本編に入る前の接客モードへと。
「あい。なんすか？」
「今の下っ手くそなツンデレは？　『榊虎丸』はツンデレ属性もあるんですか？」

それにしては随分取って付けたような演技だったけれども。
「あー。一応、演技モデルに組み込まれてるんで、バグじゃないっすよ。え、なに、お気に召しませんでした？　可愛くなかったっすかこれ」
「可愛かったですよ。表情も仕草もそれ単品だったら可愛いですよ！　でもなんか前後の繋がりがなさすぎて爆発的に違和感が」
フリーソフトの完成度ならまだしも、このソフト一応商業作品なのに。だからもっとこう、ナチュラルな感じで演じて欲しいと思うのは消費者のワガママではないと思う。
京の苦情が認識されたのか定かではないが、虎丸は「ふぇーい」とやる気のない運動部員のような返事をしたので、なんとか溜飲を下げることにした。

ゲームをプレイしてからまだ二十分も経っていない。ゴールが果てしなく遠いところにある気がして、青い空をしばらくボーッと見上げていた。このゲームで素晴らしいところは、ヒーリング系のV・S並みに心が癒されるこの透き通る空だと思う。飲み干したら体の中に綺麗な空が広がりそう。
気がつくと虎丸も一緒になってなにも言わず空を見上げてくれていたので、気が済むまでこの場でボンヤリ過ごしていた。

＊

銀色の短いノズルが等間隔で並ぶ代物が、ひどく卑猥な光景に見えた。校舎裏でのんびりと時間を過ごしているうちに、気分をすっきりさせようという虎丸に連れられて案内されたのが、運動場として使われている第二グラウンドに近い、『水飲み場』という場所。
そもそも水飲みと手洗いを兼用していることが、すでに信じられない。水分補給は過剰摂取を防ぐために、決められた補給機で使い捨てのコップを使うものだし、手を洗うにしたって手を差し出して

も一向に水が出てこないのはおかしいと思う。
「これ、センサーが壊れてますよ？」
困って助けを求めると、それが何故か虎丸のツボに入ったらしくクツクツと笑う。ちなみに今の虎丸は演技モードではなく極自然なほうの虎丸だ。
「アンタさぁ、旧時代が舞台のバーチャルシミュレーションもっとやったほうがいいんじゃないの？　こうすれば、ほら」
虎丸の手がノズル付属の十字架部分を捻ると、溢れるように水が吹き出る。あ、そうだ、確かこんな感じのを映画で見たことあった。ようやく使い方を思い出した。

一言お礼を言ってから、いそいそと手を洗い、両手に水を溜めて口に含む。現実世界での渇きが潤うわけではないが、それでも意識の渇きはだいぶ癒された。
昔の世界の水飲み場は氷に匹敵する冷たさで気持ちいい。ぬるい、というのがなく、熱いか冷たいかの大雑把な二択しかないのもなんだかスカッとする。
同じく虎丸も気分転換。こちらはノズルを上向きにして水をガブ飲みしていた。なんとまぁワイルドな。
顎を伝って滴る水と、コクコク動く喉仏がとても色っぽくて何となく凝視しているうちに、虎丸は水分補給を終えて手の甲で口元を乱暴に拭っている。
目が合ってしまう前に素早く視線を逸らした。

「なるほど、友人に付き合わされて乙女ゲーをねぇ……。そいつはご愁傷様」
ボーッと過ごしているあいだに、流れでついここまでの経緯を喋っていた。
話す気になったのは、彼らが自律ＡＩの電子体だからだ。一昔前のただプログラムに沿って返事をするだけのハリボテだったら打ち

明けてなんかいない。
水飲み場の縁に腰掛けるという行儀の悪い姿勢で、虎丸が苦笑を送ってくる。
「真剣にプレイする気がなくてこのソフト選んだのなら正解じゃね？　利用数が少ないことからもさ、このソフトが人気無いの分かるだろ。テキトーに遊んで帰ればいいさ」
「うー、そうやって優しくしないでくださいよ……。私惚れっぽいから、ＡＩにも恋しちゃいますよ？　現に圭太の時だってそれがきっかけだったし」
「圭太？」
「……別の乙女ゲーの攻略キャラです。実は以前に一度乙女ゲーで遊んだことがあって、そのとき優しくしてくれた圭太に、その――マジ惚れでした」
安っぽく口笛で茶化されたが、気持ち悪いとも言われなかったしバカにもされなかった。

人間と自律ＡＩが恋愛をするなんてこと、今の時代だと珍しいことではない。
恋をすると電脳世界に魂を引きずり込まれる都市伝説も出回っているくらいだ。
そんな噂が沸いて出るほどに、人工現実感との恋は身近なもの。
それを危険視する団体が存在するのだっていつの時代も同じ。
自分は今どんな顔をして溜息をついているんだろう。ひどい顔じゃないことを願うばかりだ。
「でもフラれちゃいました。ＡＩと本気で恋愛していること、親にバレてしまいまして。その時もうパニックになっちゃって、私をあなたのものにして、って圭太に迫ったら、なんというか、別れようって。ゲームが終われば君とはサヨナラだって……」
裏切られたと思った。本気で愛した想いも、圭太にとっては使い

捨ての感情だったのかもしれない。だって圭太は恋愛ゲームのキャラクターで、プレイヤーはあとからあとからひっきりなしに彼に迫ってくる。京もその大勢のうちの一人に過ぎないのだ。
この年齢で、遊んで捨てられる経験をするとは。当時はひたすらショックだった。
今日に至るまでこんなこと、誰にも話したことはなかったのに。

白く煌めく雲の波を視線で追う。そんな京の耳に、沈黙を挟んで呟くような答えが返ってきた。耳心地のいい、スレた感じのトーンで。
「それが最善だったんだ。人間がＡＩに恋することを避けるように、俺たちだって人間に恋することを避けてる。違う種同士が付き合ったところでろくなことにはなんねーし」
新しい見方に、眼をぱちくりさせてしまった。
今までどうして考えてこなかったのだろうと不思議に思うくらい、虎丸の何気ない発言にずっと抱えていた圭太へのわだかまりみたいなものがストンと納得した。
自分たちが自律ＡＩとの恋を禁忌とするのと同じで、自律ＡＩもまた人間との恋に溺れないようにしている。意識を持った電子体の彼らの世界でも、思うことは同じなのだ。
たまらず、目を伏せる。
「私……」
ずっと圭太に捨てられたと思っていた。都合が悪くなったからいらないよ、って。
でももしかしたら。
「私、たぶん圭太に気遣われていたんでしょうね」
「圭太が聖人君子じゃなかったら、あいつもまた傷つきたくなかったんだろ」
一瞬、何か引っかかりを覚えた。けれど京の心はすぐに圭太への想いに埋め尽くされる。

そんな大事な気持ち、少しも酌み取ることができなかった。もしそうだったなら、少しでも吐露してくれたっていいじゃない。自分一人のなかに仕舞い込む癖、そんなところまで発揮しなくていいじゃないか。

私がもっと大人だったら、誰かの心を抱きしめられる器量がある人だったら、ちょっとは何か変わったのかなぁ？

胸の奥がぎゅっと絞られて苦しい。

「私だって聖人君子じゃない、のに。圭太とずっといられ、れば、それでよかった、のに」

お、おい。戸惑う声が横合いから投げかけられるけれども、引っかかり気味の呼吸では大した体裁も繕えない。目からボタボタと涙が落ちて、地面に農褐色の染みを作る。

このままメソメソ泣き出すのはものすごく癪だった。

だから思いっきり息を吸い込んだ。

「圭太のバカヤロ――――――！！」

空が青いのは、腹から叫んだあとに見上げたとき、すっきりするためにあるからだ。

冗談ではなく、割と本気でそう信じた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0370z/

さくら色ドロップ

2011年12月8日01時02分発行